

- I . 新川拓哉「英語論文と海外学術誌」
- II . 立花幸司「英語で研究活動をする三つの理由」
- III . 編集後記

I 英語論文と海外学術誌

神戸大学 講師
新川 拓哉

本稿では、英語で学術論文を書き、海外の査読誌から出版するなどの国際的な研究成果を出すため、私がとった戦略や工夫などを紹介する。私自身は正規生として海外の大学に所属したことはなく、博士号も国内の大学で取得している。また、もともと英語がひどく苦手で、博士後期課程に進学した当初には英語で簡単な文章を書くこともままならなかった。私の経験を紹介することが、同様の状況にある学生や若手研究者の助けになれば幸いである。なお、以下では海外学術誌の傾向などについて私見を述べることもあるが、統計的なデータに基づいているわけではなく、あくまで私個人の印象にすぎないということを先に断っておきたい。

1. 英語論文が書けるようになるまで

英語論文を書き始めたのは、2012年の春だった。私は北海道大学の博士後期課程に在学中で、英米系の知覚の哲学を研究していた。私の指導教員であった山田友幸先生は、その頃すでに海外の著名な査読誌に論文を発表されており、またSOCREALという国際ワークショップの企画運営をされるなど、世界的に活躍されていた。また、当時北海道大学大学院文学研究科にあった応用倫理研究教育センターでは、眞嶋俊造准教授の主導のもと応用倫理国際会議を毎年主催していた。こうした環境にいたからか、自分も国際的に活動する研究者になりたいという思いが強くなり、2012年の秋からイギリスのマンチェスター大学に1年間留学することにした。そして、留学中に一流の海外学術誌に査読論文を載せることを目標にした。英語で学会発表をしたこともなければ、そもそもたいした業績もなかったのだが、1年もあれば書けるだろうと出所不明の自信があった。今から振り返れば当たり前ののだが、この自信は完璧に打ち砕かれることになる。結果から述べると、マンチェスターに留学した一年間では、一流の海外学術誌どころか、マンチェスター大学の哲学科が編集していたPraxisというpostgraduate journalにさえ論文は採択されなかったのだ。

マンチェスター大学では、心の哲学や現象学を専門とするJoel Smith先生の指導を受けた。具体的には、月に1回程度のペースで2000-3000語ほどの草稿をJoel先生に見てもらい、コメントをもらって草稿を改善する、という指導であった（ファーストネームに「先生」という敬称をつけるのは少し奇妙だが、「Smith先生」だと誰のことを書いているのか分からなくなる感じがするので許してほしい）。面談では「意味がよくわからない」や「何が言いたいのか理解しにくい」という旨のコメントをいただくことが多かった。英語が下手でまともに読める文章が書けないのだ。

Joel先生はとても親切で、私の錯綜した英文を辛抱強く校正してくれた。これは非常にありがた

かった。同じ分野の研究者の視点から「どう書けば分かりやすいのか」を基礎から学べる機会はないだろう。もちろん、1ヵ月論文の改稿をし続けて、これはなかなか良いものが書けた、これなら少なくとも哲学的論点についての講評がもらえるだろう、と勇んで向かったミーティングが、英語表現を含めた議論の明確化だけで終わる、という経験を繰り返すのはなかなか辛い。またダメだったかと呆然と寮までの帰り道を歩き、そのまま倒れるように眠り、夜中に起きてちょっとだけ泣いてから気合いを入れ直す、という感じだった（竹原ピストルの歌が支えになった）。けれども、この修行がなければ現在のように英語論文が書けるようにはならなかっただろう。これから海外で研究する機会のある研究者は、草稿に細かく赤を入れてもらえる環境を選ぶのがよいと思う。

英語論文を書き始めた当初は、日本語で議論を書いてから、その文章を英語に訳すというやり方をしていたのだが、このやり方には少なくとも三つの問題があった。第一に、日本語の文を逐語的に英訳すると構文がかなり不自然になってしまう（そして、文法的に明らかな誤りがあるわけではないのでどこを修正すればよいか分からない）。第二に、和英辞典などを利用して文字面だけから訳語を選んでいせいで、文脈に合わない語を使うことも少なくなかった。第三に、これがもっとも本質的だと思うのだが、行間をうまくコントロールできていなかった。日本語なら読み手が自然と行間を補って理解できるような文の流れにみえるのに、英語に直すと行間がうまく繋がっておらず、議論にギャップがあるように見えてしまう。だが、そのギャップを無理に埋めようとして細かい情報を付け足すと、文全体の流れが寸断されて読みにくくなってしまふのだ。

こうした課題を解決するために使った戦略の一部を紹介しておこう。まず、アイデアを日本語でまとめたとしても、その文章構造にはこだわらず、「訳す」という感覚を捨てること。つまり、日本語で考えたあと、もう一度英語で考え直しながら、論文本体の文章を初めから英語で書くこと。次に、Web 検索をうまく利用すること。たとえば、ある英語表現 E が哲学の議論の文脈でどのように使われているのか—そして、それが自分の意図したとおりに働くのか—を知りたいとする。そのときには、“Stanford Encyclopedia of Philosophy” と “E” を合わせて google 等で検索すれば、SEP の多くの記事のなかでその表現がどう使われているかが分かる。最後に、可能な限り “this” や “such” などの指示語を使って文どうしの繋がりを明示すること。たとえば、「明日は雨が降らない。だが、だからといって明日晴れとは限らない」という文を英語で表現するなら、“It will not rain tomorrow. However, it will not necessarily be sunny tomorrow” などと書くのではなく、また、そこに “the weather can also be cloudy” といった情報を付け加えるのでもなく、“It will not rain tomorrow. However, this does not mean that it will be sunny tomorrow” と書く、というイメージである。

Joel 先生の指導を受けながら、上記のような工夫を続けた結果、英語論文の執筆能力はかなり向上したと思う。留学期間中に雑誌論文は書けなかったものの、国際学会での発表にはいくつか採択された。そして、帰国後にそれらの学会が編集する査読付き学会誌から英語論文を出版することができた。博士号を取得してからは、グラスゴー大学やパリ高等師範学校でポスドク研究員として研究を続け、最近では *Philosophical Studies* など一流とされる海外学術誌にも論文を載せることができた。こうしてキャリアを重ねるうちに身に着いたノウハウは章を改めて紹介するとして、精神論的な論理的真理をもって本章の結びとしたい。できるようになるまでやればできるようになる。

2. 国際的な研究者としてやっていくために

本章では、国際的な成果を継続的に出すために私が心がけていることを二つ紹介する。

第一に、欧米で開催される国際会議、ワークショップ、サマースクールなどに積極的に参加し、研究コミュニティに食い込むこと。特定のテーマをめぐる最先端の研究は、まずは国際会議やワークショップで発表され、そこでの質疑などを踏まえて最終的に論文にまとめられる（私の経験した限りでは、いわゆる「大御所」の研究者を除けば、すでに出版された論文の内容が国際会議やワークショップで発表されることはほとんどなかった）。そのため、国際会議やワークショップに継続的

に参加してはじめて、最先端の研究の展開やトレンドを把握することができる。こうした情報収集は、研究のテーマを定める上でも重要である。

また、国際会議やワークショップで発表すれば、それなりの数の同分野の研究者に発表を聴いてもらえるし、ランチやディナーの時間に突っ込んだ議論をすることもできる（ただし、世界哲学会議のような巨大な国際会議では並行するセッションが多くなり、聴衆がほとんどいないということもありうるので、テーマがある程度絞られている方が望ましい）。特に、日本国内に専門家が少ないマイナーな分野の研究をしている場合には、こうした機会は貴重なものである。さらに、そうした場では、各国の哲学研究をめぐる状況について情報交換をするなど、準学術的な交流を行うこともできる。リラックスした雰囲気や近接分野の研究者と交流を深めることで、名前と顔と研究業績だけでなく、人となりや雰囲気も互いに認知することができる。このように血の通った繋がりができれば、草稿を送り合ったり、ワークショップに誘い合ったり、在外研究の機会があるときに声をかけたりすることが気軽にできるようになる。

ただし、オンライン式の会議がどこまでこうした役割を担えるのかは分からない。第二言語を用いたコミュニケーションは、非言語的な情報に強く依拠しているように感じるのので、「仲良くなる」ためのハードルは高くなるのかもしれない。

研究コミュニティに属するという目的のためには、サマースクールが特にお勧めである。たとえば、コペンハーゲン大学や中央ヨーロッパ大学では定期的に哲学関係のサマースクールが開催されている。こうしたサマースクールには、テーマに合わせて著名な研究者が講師として呼ばれ、そのテーマに関心のある多くの若手研究者が参加する。国際会議やワークショップと比べて、ソーシャルイベントが多く、準学術的な交流の機会が多い。著名な研究者を捕まえて話をすることも比較的容易である。

第二に、載りやすく名の知れた海外学術誌を狙うこと。哲学のトップジャーナルと言われる雑誌でも、採択されやすさにはかなり違いがあると思う。一つの目安は、一年間にその雑誌から出版されている論文の数である。というのも、各号の論文数の上限が定められている場合、たとえ一般的には修正付き再査読になるようなケース（例えば二人の査読者がどちらも好意的に修正付き再査読を示唆するようなケース）でも、よりよい査読結果の数が掲載数上限を超えているときには、リジェクトされることがあると思われるからだ（そうした事情を示唆するリジェクトレターを読んだことがある）。たとえば、*Nous* や *The Philosophical Review* など哲学のトップジャーナルの多くは季刊だが、*Philosophical Studies* や *Synthese* は例外的に月刊である。したがって、*Philosophical Studies* や *Synthese* は狙い目のジャーナルだということになる。他にも、ランクがそれほど高くない割には名が知れており、それなりによく読まれているジャーナルもあり、それも狙い目である。たとえば、*Acta Analytica* や *Disputatio* などがある例だと言えるだろう。さらに、哲学分野のジャーナルはスコープの広いもの——哲学にかかわるものならなんでも OK——が多いが、*Philosophical Explorations* や *Neuroethics* など、特定の専門分野に特化したものもある。もし研究テーマが合うならば、こうした雑誌は編集者に専門家が多いため、より適正な評価が受けられる可能性が高い。採択率の低いトップジャーナルを狙いつづけてリジェクトを重ね、結局論文が出版されないというのは最悪である。他方で、知名度の低すぎるジャーナルから出版されたせいで、ほとんど誰にも読まれないということも悲しい。載りやすさと知名度のバランスをとるのが重要だろう。

関連して、英文校閲はできればやった方がいい。予算等の関係で難しければ、アブストラクトとイントロダクションだけでもよいだろう。著名な海外学術誌は採択率が10%を下回ることが珍しくなく、編集者の判断でリジェクトされる論文も多い（採択率についてはリンク先の記事を参照のこと。記事は2018年のものだが、状況がよくなっている感じはしない：<https://dailynous.com/2018/05/24/insanely-low-acceptance-rates-philosophy-journals/>）。多数の投稿論文を査読者に回す価値があるかどうか素早く判断しなければならぬ編集者にとって、アブストラクトとイントロダクションの書き振りは重要である。これは、学振や科研費の申請書をイメージすると分かりやすいかもしれない。なお、

これまで使った会社の中では、Lex Academic が抜群に良かった。COO に哲学研究者の Constantine Sandis が入っているからか、哲学の知識のある人が校正してくれた印象がある。お勧めである。

ところで、よく言われることだが、海外誌からリジェクトされるのは当たり前なので、リジェクトされて落ち込む必要はない。有名な研究者でもリジェクト経験は数多ある。ただ、これもまたよく言われることだが、「査読者まで回らずに編集者判断でリジェクトされたらすぐに別のジャーナルに出し直せばいい」という考えに、私はあまり賛成しない。投稿時にはよく書けていると思っていた論文なのに、何が悪かったのかを探るモードで読み直すと、(特に実質的なコメントはもらっていないにもかかわらず) 直すべきところが見えてくることが多いからだ。査読コメント付きのリジェクトはもちろん、コメント無しのリジェクトも糧になる。

3. おわりに

私も哲学研究者の端くれであり、その意味では国際的に活躍する著名な哲学者と同じフィールドに立つプレーヤーの一人である。たとえば、心の哲学で現在最も影響力がある David Chalmers や Tim Crane といった研究者に対しても、私から議論を吹っかけることで、彼らの理論や立場に影響を与えることができるかもしれない。昔は、英語圏の著名な現役の哲学者の理論について論じるときも、アリストテレスやウィトゲンシュタインの哲学を研究するのと同様に、それを理解したり評価したりできるだけで、こちらから彼らに影響を与えられるということを自覚していなかったように思う。だが、そんなことはない。私の議論が彼らに影響を与えることだって十分にありうる。それどころか、世界的に若い世代を方向づけるような研究ができるかもしれない。私にとって、英語で哲学をやることの面白さはここにある。

千葉大学大学院人文科学研究院
立花 幸司

2021年の冬、ニューズレター編集長の金杉武司さんから、「英語で研究活動をする事」について何か一つ書いてもらえませんかという依頼をいただいた。古代ギリシア哲学を専門とする私のような者が異文化(?)である科学哲学会のニューズレターに寄稿するのはいかにも場違いな気がした。しかし金杉さんは、大学院生時代にクワインやデイヴィッドソンを読む勉強会で分析哲学の文献の読み方を教えてくださった先輩であり、また私の初めての学会発表(科学基礎論学会)のきっかけを作った下さった人でもある。そうしたことから個人的にとっても恩義を感じており、本学会の会員の方々のことを思うと気が引けるものの、厚顔を承知の上で引き受けさせていただいた。

とはいえ、引き受けはしたものの、申し訳ないことになかなか筆は進まなかった。というのも、私が英語で研究活動をするようになったのは、何かに語るような高邁な目標があったのことはないからである。では、もともと英語が好きで得意なのかといえばそういうわけでもないし、海外で学位をとってきたわけでもない。つまり、日本に居ながら英語で研究活動をする方々(の多く)がもっているような、何か「背景」のようなものが私には欠けているのである。では、自分はいったいなぜ英語で研究活動をするようになり、それを続けているのか。考えれば考えるほど自分でもよく分からなくなってきた。私はなぜ、大して出来もしない英語で、日本語であればしなくてもよいような苦勞を忍受しながら、研究活動を続けているのか。そこにはどのような意義があるのか。そう自問すればするほど答えは見つからず、結果として当然、筆はますます進まなくなった。そうこうしているうちに入試やら何やらと年度末の慌ただしさに押し流され、気付けばメ切間近になってしまっていた。

引き受けた以上は何か書かねばならない。しかも、できれば会員の方々に有意義な何かを、である。しかし「背景」のない自分には、英語での研究活動を支える学問的な理念や、優れた語学力に基づいた鋭い文化批評、留学体験に裏打ちされた強固な信念など、背景をもって英語で研究する人たちからよく耳にする力強い言葉は出てきそうもない。そんな私に何が語れるのかと考えた結果、結局のところ、そうした背景のない人間が英語で研究をするに至った経緯、そしてそれを続けるということがどういうことなのかということ自体を晒すことで、背景をもたない似たような人たちに、幾ばくかでも有益な情報を提供しようという結論に至った。とりわけ、英語で研究をする人というのはとにかく英語が達者な人という印象を持たれるようなので——実際私も英語が得意だと勘違いされることがよくある——、そうではない人もいるということ、恥を忍んで我が身を晒してみること、こんな人でも続けられるのなら「じゃあ自分もやってみようか」と思ってもらえれば幸いである。

(そうして文章を書き始めたところ、瞬く間に文字数が二万字を超えてしまった。中学の時にクラス中から笑われて赤面した時以来、英語に苦手意識をもち、高校時代は理系科目偏重の生徒として英語の勉強がなござりとなっていった自分が、どのような経緯を辿って、英語で研究活動をするに至ったのかを綴りはじめてみると、ニューズレターとはいえ学会誌に馴染まないような恥ずかしい話題も少なくなかった。しかしこうした研究者も居るのだと示すことで何かの役に立てればと、恥ずかしい経験や思いがけない珍事、目を疑うような理不尽な扱いや有り難い出来事、そして英語が苦手な人間が苦手意識を抱えたままでも英語で研究を続けていくべく私が体得したさまざまな術など、英語が得意な人であれば必要もなければ経験もせずに済みそうなことをいろいろと書いていっ

たが、さすがに文字数が超過しすぎてしまった。しかも当初のメ切まで過ぎてしまい、恩義を感じているはずの金杉さんに迷惑を掛けるという本末転倒な事態に陥ってしまったため、理性を發揮してばっさり割愛することにした。そして、冒頭で述べたこの文章の性格を述べた冒頭部分だけを残し、プラトン先生であれば激怒するであろうが途中の経緯はすべて飛ばして、最後の節として用意しておいた私が英語で研究活動をする理由をまとめた箇所へと続けることとした。)。

・・・そのような経緯を辿って英語で研究活動をするようになった私だが、そんな私が英語で研究活動をする理由をまとめるとおもに以下の三つになる。

第一に、批判している相手に届く言語で書くためである。私の個人的な感覚として、陰口は叩かない、何か文句があるときは本人に直接言うべきだと若い時分より思ってきた。学術的な批判はもちろん「文句」ではない。それに、本人が読みえないような言語で書いたからといって「陰口」となるわけではない。しかし、誰かの何かを批判するのであれば、できれば直接本人に向かって、少なくとも本人がアクセスできて反論できるような仕方で行うのが望ましい。私たちが営んでいるのは哲学である。多くの人が口を揃えて、「言葉」がすべてだという。そしてその営みの根幹の一つは「対話」だという。それだから、自らが批判する人に届く言葉で語ることは、哲学の基本姿勢である。

このことは、科学哲学のような比較的同時代的な哲学的営為にはばかりあてはまるわけではなく、解釈研究のような場合にもあてはまる。もちろん、アリストテレスやカントに限らず、私たちが吟味し批判する対象となる著者の大半はすでに亡くなっている。それだから、私たちの営為の大半は「陰口」とならざるを得ないのかもしれない。しかし、そうした哲学者たちの著作できえ、私たちはそのテキストに直に向き合うことができるわけではない。数百年、数千年と取り組まれつづけ地層のように積み重ねられた解釈研究の蓄積があり、その上に現代の解釈研究者たちがいる。その人たちの手による論文や翻訳があり、研究書や概説書がある。私たちはそうした蓄積を通じて、いわば地層を掘り起こすようにして、テキストへの向き合い方を学んでいく。テキストのなかの或る一節を読み解くにも、後代の注釈書や最新の研究論文を参照する。過去の偉大な哲学者たちと向き合う場合も、やはり同時代を生きる研究者たちとの対話と対峙がある。それだから、哲学的なものを著すどのような場合でも、相手に届く言葉で著すことはその点では望ましいのだと考える。

もちろん、「相手に届く」というのは幅のある表現である。英語で書きさえすれば本人が読むとは限らない。それどころか、いわゆる大御所になればなるほど、英語で書いただけというのでは本人に届く可能性は限りなく低いだろう。そう考えると、できるだけ本人に届くようにするためには、それなりの雑誌や書籍であることのほうが僅かなりとも望ましいのだろう。とはいえ、使用する言語の選択はこの点で決定的な影響をもつ。日本語で書くということは、実質的には、日本の研究者以外のほぼ全ての研究者には、つまり世界中のほとんど全ての研究者には、その言葉は届かないということである。もちろん、日本の研究者を批判する場合は日本語で発表したり書いたりすることに何ら問題はない。しかしそうではない場合、英語で研究活動を営むことを選ぶ一つの理由があるということになるだろう。(その意味では、自分が日本語で書いたものが英語に翻訳され、世界中の人がそれを読むというのが理想だと言えるのかもしれない。)

第二の理由は、第一の理由の裏返しで、自分の議論に対する率直で、しかし建設的な批判が欲しいがためである。私は、私が論文の中で批判したり参照したりする人たちや、そして私と同様の関心をもっている研究者たちが、私の議論をどう受け取りどう批判するのかに興味がある。それは、自説に誤りがあればそれを取り除き、問題としている事柄に関してより確からしいものに近づきたいという比較的純粋な動機もあるが、同時に、自分の議論がどこまで通用するのか知りたいという比較的俗な動機もある。私は、(おそらく本学会の多くの会員の方と同様に)自分の研究で参照する文献のほとんどは、日本語話者以外の研究者の手により英語で執筆されたものである^(注1)。それだから、自分が参照し批判する人たちからのフィードバックを得るためには、英語で書かざるを得ないのである。

第三の理由は、第一の理由と第二の理由の背後にある、研究者ネットワークに関する理由である。この理由に気付いたのはごく最近の、2021年12月28日の某忘年会でのことである。能力的にも性格的にも国際的な研究活動に向いていると私が思っている日本人研究者にAさんがいる。Aさんは、海外で博士号を取得し、ハイデガーやウィトゲンシュタインを駆使した重厚な研究を得意とするのだが、なぜか日本語でばかり研究をしている。なぜAさんはずっと日本語なのだろうと私は前から気になっていた。もちろん、それぞれのキャリアパスがあってしかるべきなので、人のスタイルに口出しすることは私の好みではない。しかしAさんとは、私が学部生の頃よりお世話になっている先輩という間柄でもあるので、その忘年会の終盤で、なぜ英語で研究活動しないのかと思いついて訊いてみたことがある。その時の答えが印象的であった。彼が言ったことの正確な再現ではないが、結局のところ、Aさんの分野については日本のなかに一定数の研究者人口があり、そのお陰で海外に出ずとも十分な水準で研究活動が行えるから、というものだった。十分かどうかの判断は私にはできないが、たしかに、ハイデガーもウィトゲンシュタインも日本の哲学研究者の人口割合でいえば(少なくとも今はまだ)大所帯である。私の専門はアリストテレスであり一定数の研究者はいるが、それでも同世代の研究者が集まる度に、「今年の日本哲学会の大会プログラムを見たけど発表者が全然ないよね、大丈夫なのかな」という声を耳にする。しかも私の場合は、アリストテレスの倫理学がもつ道徳教育論の哲学的な基礎の解明を博士論文のテーマとするニッチなところがあり、博士論文執筆中は、このトピックの面白みは指導教員やごく一部の人を除いてほとんど誰にも伝わらなかったように感じていた。さらに最近では、現代徳倫理学というアリストテレス倫理学の忘れ形見のような分野でも研究活動をしているが、そこでも私の切り口はこれまであまり参照されてこなかった分野の経験的知見を組み込みながら理論を提示するというもので、似たような関心をもつ研究仲間を国内で見つけることは絶望的であった。それだから私は、ここ十年ほどは、自分以外に日本人を一人も目にするのしないような、海外で開催される国際会議でばかり発表してきた。神経科学者たちが集まるイタリアの学会で発表した翌週にはスコットランドに移動してグラスゴー大学神学部が主催した宗教学の学会で発表したり、米国の学会で行った自分の宇宙倫理の発表についてNASAのエンジニアとMITで生化学の分野で博士号を取得した神父の三人で焚き火を囲んで議論した同じ週に、ノルウェーの学会で徳倫理に関する自説を発表して辛辣な批判を浴びたりもした。オックスフォード大学の数学部主催の学会で発表したのに東欧からきた神学部の教員と意気投合したかと思えば、ポーランドの学会では某著名研究者Zの研究を本人を前に自説を元に批判したところ激しい応酬となり、結果、会場にいた面識のない様々な人と交流をもつようになったこともあった。Aさんの話を聞いたとき、自分が無意識のうちに、潜在的にであれ自分と研究関心を同じくする——あるいは近しくする——哲学研究者をもとめて各地で英語で研究活動を行うようになっていったのだということに気がついた。個人的には、これは非常に大きな気づきであった。

そして実際、模索しながらいろいろと動き回っているうちに、時として予想だにしないかたちで、上述の人たちのようなさまざまな研究者たちと繋がることになった。もちろん、出会った多くの人たちとはその学会限りでの交流であるが、それでも、私の研究に関心をもってくれる人たちが、そして関連した研究をしている人たちが世界の様々なところに〈実際に〉居ることを感じられるのは、ちょっと風変わりな自分の関心を信じ育み続けてきた自分に対する自信にも繋がり、また今後の研究の励みにもなっていた。また、そうして出会った研究者たちの一部と継続的な交流が続くこともまた、私にとっては英語での研究活動を継続する一つの動因となっていた。定期的に国際学会で再会したり共著論文を執筆したりすることが割合としては多いが、先方のプロジェクトのメンバーとしての参画や共同での競争的資金の獲得、職位昇進のための推薦書やサバティカル時の奨学金獲得のための推薦書の執筆、そして個人間や家族ぐるみのプライベートな交流なども、英語での研究活動の継続を後押ししている。

こう書くと、英語で研究活動することを私が満喫しているように映るかもしれない。しかしこうした理由のすべては、やはり、英語で哲学研究をおこなう積極的な理由ではない。むしろ、私にとっ

ての哲学という営みを継続していく上で、やむを得ずおこなっていることである。その意味では、日本語が共通言語であるような可能世界であれば、私は日本語だけで研究をしていたであろう。しかし、私の生きている現実の世界はそうではない。現実のこの世界で、英語を母語として生まれたわけでもなければ、帰国子女でもなく、豊かな英語教育を受けたわけでもなければ、語学的な才能に恵まれたわけでもないこの私が、自分にとってかけがえのないこの哲学的な営みを継続的にこなうためには、英語で研究活動をおこなわざるをえなかったという、ただそれだけのことである。いわゆる英語帝国主義に対して恨み節を言う御仁もおられるし、その気持ちはわからぬでもないが、個人的には、アッティカ方言を範とする古典ギリシア語が共通言語だったあの時代でなくてよかったという思いの方が強い。古典ギリシア語で発表し論文を書くことに比べれば、英語でそれをおこなうことの方がずっと容易いのである。

国際会議に出席する度に思うのだが、もし英語という共通言語がなければ、学会で出会うさまざまな人々、たとえばノルウェー、ポーランド、スウェーデン、ドイツ、イタリア、スペイン、ギリシア、インド、シリア、UAE、ウクライナ、ロシア、中国、韓国、ブラジル・・・の人々とどうやってコミュニケーションをとればいいのか。こうした国の人たちに日本語を学ぶよう要求することはできないが、とはいえ私がこうした人たちの母国語をすべて学べるわけでもない。英語という共通言語があるお陰で、私は著者に届く言葉で自分の哲学的な主張を論じることができるし、私を批判する人たちからフィードバックを得ることができる。そうして、関心を同じくする研究者たちと切磋琢磨し、自分の哲学的な関心を深め育むことができる。そのように考えていくと、私が英語で哲学研究をおこなう理由とは、私にとっての哲学する姿勢の問題だということになる。こうした姿勢がどれほど共感を得るものなのかは想像もつかないし、結局のところ、それは個々の研究者の哲学的な関心とキャリアパスの問題であり、その意味では研究者としての生き方の問題でもあるので、共感を得る必要などそもそもないのかも知れない。しかしもし、私と同じように「背景」をもたない人でも、自分が批判する研究者と直接議論したいと考えたり、自分の哲学的な関心に共鳴してくれる研究者を国内ではなかなか見つけられていないと感じたりしている場合は、日本国内に居ながらも英語で研究活動を始めることで少し違った景色が開けてくるかもしれない。

注1 手元にある最新号 (Vol.54, No.2) を見てみると、依頼論文2本、応募論文2本、サーヴェイ論文1本の合計5本の論文で、参照文献数は全部で263本、そのうち英語文献が234本 (89.0%)、日本語文献が27本 (10.3%)、その他としてドイツ語文献が2本 (0.8%) であった (少数第二位を四捨五入)。当たり前のことだが、これは参照に値する論文が英語と日本語 (とドイツ語) の文献にしかないということの意味するものではない。きっとイタリア語でもロシア語でも中国語でも、そして他の様々な言語でも、素晴らしい論文はたくさんあり、もしそれらに等しく目を通すことができたなら、(日本語圏を対象とした研究でない限り) 参照される日本語文献の割合は今よりも低下することだろう。しかし、私たちにはそれら諸語で書かれた論文を渉猟することができない。私たちはお互いに、自分たちが読むことのできるごく限られた一部の言語のなかから選んで文献を挙げるしかないのである。英語であれ何であれ、国・地域・文化を超えた共通言語に頼ることで、文化的な機微を捨象するという代償を払いつつも、諸国の研究者たちの手によって書かれた論文にアクセスすることができるようになる。そうして諸国の研究者たちと対話し、意気投合することもできるようになるのである。共通言語のない可能世界で営まれる哲学研究は、想像するだけでも大変そうだと、日々思う次第である。

コロナ禍は私たちの研究環境に大きな影響を及ぼしました。その一つは、オンラインでの学会開催や研究会開催が増えたことです。これらの多くは、コロナ禍中で学会や研究会を開催するための必要性から行われるようになったものですが、他方で遠方でも容易に参加できる点などメリットも少なからずありました。そしてそれは、海外の学会や研究会にも参加しやすくなったということでもあります。しかし、海外の研究者と直にコミュニケーションをとる機会が増えた一方で、英語でのコミュニケーションという壁に直面し、その機会を十分に活かせず悩んでいる研究者も少なくないことでしょう（私もその一人です）。

そこで今号では、「英語での哲学研究活動」というテーマで、新川拓哉さんと立花幸司さんのお二人にご寄稿をお願いしました。お二人ともこれまで積極的に英語での論文執筆に取り組まれている他、国際的な学会や会議などに多く参加されてもいますが、文章を拝見する限り、そこまでの道りは平坦なものではなかったようです。それを乗り越えた今のご活躍の背景には、お二人の哲学への真摯な姿勢があることがわかります。またその国際的な活動が実に充実したものであることもわかります。ご多忙中にもかかわらずご寄稿下さったお二方には、心より御礼申し上げます。

なお、コロナ禍中ということもあり、前年と同様にこの一年間で「国外学会参加費補助」制度の利用はありませんでした。

本ニューズレターは、学会員の間での自由な情報交換の場です。ご自分の研究の紹介や海外での研究経験の紹介、研究会の紹介といったものだけでなく、SNS でつぶやきたくなるようなちょっと気になることでも結構です。テーマは問いません。学会事務局が随時、投稿を受け付けていますので、皆さん奮ってご寄稿下さい！

(金杉武司)